

## 家族誌「いけがみ」を出した

肥後 知恵子

(この文章は、つれあいと協議し、彼の協力で書きました)

二〇〇三年七月、家族誌「いけがみ」1を出した。

それまでに、つれあい(以下、彼と書く)の母、兄弟姉には「くるま」という家族誌があつて、一九六三年創刊号から二〇〇〇年一二月の11号まで続いていた。「くるま」4号に私は旧姓のまま「母」という題の一文を載せてもらった。「くるま」10号に彼が書いた「共働きの功罪」は、働きながら彼の実家、私の実家の家族に支えられた日々が綴られている。

「くるま」という誌名は、彼の父が鹿児島市で荷車大工の仕事をしており、そこでは、荷車は「くるま」と呼ばれていたからだと聞いた。長兄がその家業を引き継いだが、時代にのまれてやがて彼の家族はそれぞ

れ自立していかざるをえなかった。

「くるま」11号のあと、私にも『家族誌』というものを出すことができかもしれないと思って「いけがみ」を出してみることにした。

池上に住むようになって三十数年、池上はいい町で、おおげさにいえば生涯の半分近くをすごしたところである。

二〇〇二年五月、「いけがみ」という誌名で原稿募集の文を、かつて「くるま」に筆者として掲載され、今もつきあっている彼の家族、私の実家の方々、それに数十年来つきあっていたいているの方々およそ三十数人に送った。

雑誌作りにまったくの素人であった私の呼びかけに、十四人の方々が応えてくださった。望外のことだった。

参考までに、「いけがみ」1に載せた私の文章を再掲してみる。

「いけがみ」発刊に寄せて

「いけがみ」を発刊しようと思ったのは、一昨年、中学の同期生の小冊子を作る作業をしているなかでした。そこで身近な人たちに寄稿して

いただいで、小さな文集を作ってみるのも良いのではないかと考え、これに踏み切りました。

何よりも次世代の人たちに何を引き継いでいきたかったからです。

メールや電話で話していても、なかなか各人が思っていることや考えていることを、伝えあえないでいます。

別にりっぱな文章を書くことではなくても、日常感じている素朴なことでも、文章にすることで、思わぬ発見や喜びがあると思います。

今回、私の提案に賛同してくださった方が多くいらして、驚いています。

お互い、お顔やお名前も知らない方もいらっしやるわけですが、「いけがみ」を基地に発信できたのも、皆さまのお陰です。

今後も続けていきたいと思えますので、ぜひご協力下さいますようお願いいたします。

二〇〇三年一月

小冊子作りは彼がワープロを活用して協力してくれた。

長姉（船橋市在住）は「隣組」、義弟（川越市在住）は「我が家の愛犬」、娘の義母（福島県下郷町在住）は「今の私」などをご寄稿下さった。ほかに四十数年前、われわれを結びつけることになったM氏（豊島区在住）の「A氏夫妻のゝ第二の人生」、義兄（新宿区神楽坂在住）の「一九三九年大陸生活の始り」などがある。

また、義弟（鹿兒島県始良町在住）は「回想・中山クミ、終焉の日々」、義姉（鹿兒島市在住）はもめん随筆として「野菊の如き女童なりき」があつた。

直接の家族では、娘が「暮らしのなかで・楽しかったワックスがけ／嬉しかったこと」、そのパートナーが「アイルランドを旅して」、ロンドンに在勤していた息子が「魅惑の古城巡りの旅」（メールの交信があつて時おり送ってくる見聞をそのまま掲載した）などを書いた。

義姉は詩「冬日」、童話「灯おくり」も書いてくれた。童話「灯おくり」は、一九四五年夏、西瓜の実るころ、知覧から近い町に特攻隊員が来て

女学生と交流し、やがて沖縄へ出撃の日、女学生が開聞岳でたいまつを燃やして送る、という話である。この童話は、原稿の肉筆のまま掲載した。

ページの余白には休憩室として写真や絵とともに、「池上の地名の由来」、「昔の池上本門寺絵図」、「最近の池上駅周辺」などを入れた。

総ページ数九十六、発行部数六十部の小さな冊子である。ご寄稿いただいた方々には、自分の文章が載せられた小冊子を喜んでいただけた。

二〇〇七年一月に「いけがみ」2を出した。

「いけがみ」2には、義兄の「モッタイナイ」、義姉「戦争と私」、義弟「風呂敷」、義姉「鹿児島弁、語り歩き二十年」、義弟「我が町のこと」、M夫人の「退職して三年の今、私は：」、仲人をしたHさんの「大名町教会のこと」、甥の「現代考論 これてよいのかニッポン」、娘の義妹・Yさんの「母親になって」、娘の「提出レポートから」、息子の「倫敦駐在員見聞」、彼の「大東亜戦争の記憶」などが載った。この号にも、義姉は

創作童話「幻の、まのひ、飛行場」を書いた。

ページの余白には、「池上に把留都がやってきた」、「池上本門寺、観光案内」、「池上梅園」、「開聞岳」などが載った。

この2号はページ数が百二十四ページになった。印刷部数はあいかわらず六十部。一部千円を頂いたが、必要な経費は負担した。そこに盛られた一つひとつの文集は、素朴なものである。

「いけがみ」1の義兄「一九三九年大陸生活の始り」は、地図入りで、彼が青年時代に満州・満鉄に転職した当時を思い返して書いたもの。当時の日本の一青年が体験した見聞が生々しく描かれている。「いけがみ」1の「隣組」からは、戦前の町内会の雰囲気を読み取れる。「大東亜戦争の記憶」では、一九四五年八月十六日、疎開先で敗戦を知り、小学校代用教員だった義姉がもってきた青酸カリで一家心中しようという話になったことが書かれている。「一攫千金を夢見た話」は息子の岳父が北海道大樹町に在勤していたときの話。

「大名町教会のこと」では、一九五〇〜六〇年のころの福岡にいた青

年の状景が浮かぶ。

「倫敦駐在員見聞」、筆者はウインブルドンテニスを日経新聞欧州局長、東芝欧州の副社長と見るのだが、同時に、アウシュビッツに行った経験を写真入りで書いた。

「いけがみ」1・2とも筆者は、八十歳前後から二十歳台まで、ふだんの生活では、この二〇〇〇年初めの何年かを、年金で暮らしている方がた、働いて家族と共に生きておられる方々である。なんらかの機会で会うことがあって、それぞれ日常の会話はあつた。しかし、本当は、こんなことがあつたんです、今考えること、思っていることを伝えたい、知ってほしいという気持ちで、「いけがみ」1・2にこめられているように思われる。

この冊子は、たかだか私の周辺の家族と、それに関係する方々のきわめて私的な交流を綴つたものである。

私は向島で生まれた。敗戦の年ちょうど牛島国民学校四年生で、初め千葉県のお寺に集団疎開した。一九四五年三月十日の東京大空襲のとき、

父母兄妹はなかなか話さない経験をしたが、私はなぜかひとりだけ父方の静岡県榛原に縁故疎開していて、大空襲には会わなかった。

彼は鹿児島市生れで、兄たちの従軍と復員、空襲や戦後の辛い生活を体験した。

東京でその二人が結婚したが、それから働く、子どもを育てる時期のなかで、初めの段階は彼の家族誌「くるま」、あとになってからは「いけがみ」が、それぞれ出身家族との絆を深めてきたと思う。彼は早くに父親をなくしたせいか、ことに兄弟姉との結びつきは強い。

彼はワープロを使うので、ほかにも亡父の「五十年祭誌」を作ったり、義姉の童話集を出したりしてきた。

横からみると彼の一連の家族は一種「団結力」が強い。その中身をこの二つの小文集はわからせる。「くるま」、「いけがみ」はこの六十数年の、私を囲む鹿児島、東京での、それぞれの小さな一人ひとりとその家族が懸命に生きてきた、今も生き続けていることを知らせてくれる。



私もやがて古い、日常の記憶すらなくしていくにちがいない。もし人が何がなにか分からなくなっていくにしても、「いけがみ」で読んだ、感じたことは残っていく。

元気でいるうちに、できれば「いけがみ」3を出したいものだと思う。しかし、なかなかの日常でいる。

そんなある日、娘が「いいじゃない、看護師になったら、家は近いし、あたしが手伝ってあげるわよ」といつてくれた。娘は就職困難期の一九九二年、ハングルと英語で小さなメーカーに就職して八年間営業職を経験したが、<sup>、</sup>つれあい<sup>、</sup>の寛さでそこを辞めて再度大学の看護学科に学士入学した。二〇〇九年二月、看護師試験、保健師試験を受けることになっっている。

私は家族に助けられてきた。結婚して池上の小さな建売住宅に、ある日父が来た。小さな庭の縁側にひざしを和らげる屋根をつけてくれ、まだ小さかった息子と娘にブランコを作ってくれた。別の日、彼の母が鹿児島から来た。彼はその日も帰りが遅かったが、義母が教えてくれてつ

くったカゴツマの「カノコンオツケ」をおいしいといって食べた。息子と娘は、その味を知ったのかどうか。

ブランコを作ってくれた父、義母に甘えた時間が懐かしい。家族となつた人たちとの今の日常の交流と「くるま」、「いけがみ」を通じての絆は、いつまでも続いてほしい。